

序論：「神を愛する者となる」

みなさん、おはようございます。今朝もこうしてみなさんとともに礼拝を捧げることができる幸いを覚え、感謝いたします。

「神を愛する者となる」。昨年に引き続き、今年もこの標語を掲げて、2023年の教会の歩みが始まりました。元旦礼拝では、神を愛する者となるとは、どういうことなのか、森田先生がみことばから教えてくださいました。そのとき、「神を愛する者」について、3つのポイントが挙げられていました。それがこちらです。神を愛する人とは、①神を信じる人である。②神に愛されていることを覚える人である。③神に心から従う人のことである。

私たち蛭池聖書教会は、2023年も、神を信じる教会です。神様に愛されていることを忘れないで、深く自覚する教会でありたいと願っています。そして、神様に心から従っていきたいと思います。そういう祈りと願いのもとで、今年も歩んで参りましょう。

さて、今朝は、神様から与えられた箇所として、ヨハネの手紙第一からみことばを取次ぎたいと思いました。実は、昨年のも頃頃から、なんとなくヨハネの手紙から、みなさんとみことばを分かち合っていたと思っていました。そして、準備をしていく中ではっきりしてきたのは、「神を愛する者になりたい」と願っている教会にとって、このヨハネの手紙のみことばは、本当に大切なことを教えてくれる手紙だなあということでした。そういうわけで、今年は礼拝のメッセージでは、ヨハネの手紙を扱っていきたいと考えています。

1. ヨハネについて/ヨハネに倣って

手紙の著者とされている「使徒ヨハネ」は、言わずと知れたイエスさまの愛弟子であり、12弟子の中の一人の「ゼベダイの子ヨハネ」です。実の兄であるゼベダイの子ヤコブとともに、12弟子の一人に選ばれました。若いころには、イエスさまから「ボアネルゲ（雷の子）」（マルコ3：17）というあだ名をいただくほど気性が荒い人でした。しかし、今では多くの人が使徒ヨハネのことを「愛の使徒」と呼びます。ヨハネの書いた福音書や手紙に、繰り返し「愛」という言葉が現れ、私たちに父なる神様の愛、イエス・キリストの愛を伝えているからです。

そして、ヨハネは、イエスさまに愛されていたことを本当に深く自覚していた人でした。福音書を書いたとき、ヨハネは自分の名前を直接は記さないんですね。その代わりに、自分のことは、「イエスが愛しておられた弟子」とか、「イエスが愛された弟子」（ヨハネ13：23、19：26、21：20）という具合に表現していました。ヨハネは、それほどまでに、イエス様から愛されているということを深く心に留めていた人でした。イエスさまの愛に触れた人物だったのです。

私たちは、普段、自分のことをどう言い表すでしょうか。私はあれができません、これが得意です、こんな仕事をしていて、今はこういう役職についています、と、自分の持っているもので説明するのでしょうか。しかし、ヨハネはこう言うんです。私は「主に愛された弟子」です、と。そんな風に断言できたヨハネです。彼が、主を、神を愛さないはずはありません。若いころに雷の子とまで呼ばれるほどに気性の荒かったヨハネは、主イエスの愛を受けて、神様を心から愛する者へ、そして兄弟姉妹を愛する者へと変えられたのでした。ヨハネの心には、主の愛が満ちていました。何とも言えない喜びが彼のうちがありました。

今朝の御言葉の4節でヨハネは、この手紙を書き送った理由について、「私たちの喜びが満ちあふれるためです。」と言っています。この手紙を読む者たちと、ヨハネは、主に愛されている、その喜びを分か

ち合いたいと、心から願っていました。

その喜びに私たちも与りましょう。そして、その喜びを、今度は他の人々＝自分の家族や、周りの人たちと分かち合う者になりたいと思います。神を愛する者として、私たちもこの喜びに生きて来ましょう。この世にあっては確かに、困難があり、喜べないことも沢山あります。しかし、ヨハネの手紙を読んでいくと分かってくるのは、神様は私たちが暗い闇の中を歩むのではなく、光の中を歩むことを願っておられ、そしてそうできるように助けてくださるといことです。私たちは、いろいろな失敗します。罪を犯してしまう弱さを持っています。しかし、私たちが何度失敗して、どんな状況に落ちてしまっても、神様の愛が変わることはありません。雷の子と呼ばれたヨハネはどうだったのでしょうか。気性の荒かった彼が、何の失敗もしなかったとは思えません。軽率な言葉や行動で、だれかを傷つけたり、取り返しのつかないミスをしたことも、あったのではないのでしょうか。

そのヨハネが、神の愛について大胆に語る人へと変えられました。イエスさまから、愛を受け、いのちを受けたからです。4：16で、ヨハネは言っています。「私たちは自分たちに対する神の愛を知り、また信じています。」

2. 初めからあったもの

さて、1節をお読みいたしましょう。「1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目を見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。」

この語り出しは、ヨハネの福音書の語り出しとそっくりです。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」ヨハネが、ここで「初めからあったもの」と言っているのは、もちろんイエスさまのことです。聖書は、イエス・キリストは、初めからおられたお方であると、教えています。ヨハネの福音書はイエスさまのことを「ことば」と表現していますが、その「ことば」であるお方は「神とともにあった。ことばは神であった。」とまで言われています。ヨハネの福音書で強調されているのは、イエス・キリストが天から来られたお方であるということ。福音書は、イエスさまの生涯について語っている書物です。このお方が何を為し、どんなことをお語りになられたのか、そしてどのように死なれたのかについて語っています。イエスさまが人として生きられた、その地上の歩み、人間としてのご生涯に焦点があてられていくのですから、ヨハネはその初めのところで、このお方が天から来られたということを強調しました。天から来られた神であるということ、印象付けています。

しかし、手紙の方は同じように、初めからおられたお方＝人間を超えた存在、神であるという風に語り始めながら、そのお方について「私たちが聞いたもの、自分の目を見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの」という風に福音書とは違う切り口を強調します。イエス・キリストが天から来られたお方であることは変わりません。しかしここで強調されているのは、実際に人となられたという事実です。天から来られた神は、実際に肉体を取り、人となって自分の前に現れたのだという事実です。ヨハネはイエスさまについて、実際にそのお語りになる声を聞き、自分の目でじっと見て、そして触れたのです。

ヨハネがこのことを強調するのには、理由がありました。この頃教会の中でささやかれるようになったグノーシス主義という異端の教えを警戒していたからです。それは、ギリシャ哲学に影響を受けて、霊や魂は聖いものであるが、肉体は穢れていると教えていました。そして、神であるイエス・キリストが穢れた肉体をもつことはあり得ない、と主張しました。肉体をとったように見えていただけで、神であり続け、完全な人間になったわけではない、という、「仮現論(かげんろん)」と呼ばれる異端に発展しました。

この手紙を書いたころ、既にヨハネは高齢になっていました。直接イエス様を見たり、話したことがある第一世代の弟子や証し人たちの多くが既に世を去りつつありました。教会は、直接イエスさまと会ったことのない第二世代へと、世代交代が進んでいました。ヨハネは、弟子の中で最も若い者であり、なおか

つ長生きをした人物です。高齢となっていたヨハネは、イエスさまに直接会ったことのある第一世代の、最期の生き残りです。

実際に主イエスを見、主イエスと語り、そして主イエスに触れたヨハネは、1節の最後で、自分が出会った主イエス・キリストのことを「すなわち、いのちのことば」であると結論づけています。やはり、福音書と同じように、イエス様を「ことば」と表現するのですが、それは「いのちの」ことばでした。

3. 永遠のいのちを見た

神であるお方が人となってこの地上に現れた。それは驚くべきことです。とてつもなく凄い、信じられない出来事です。しかしヨハネが伝えたいのは、それだけではなく、このお方に「いのち」があるということです。2節を見ていきましょう。文の構造からすると、2節は挿入句であるとされています。それは、ヨハネが思わず付け加えた言葉であるということです。そこにはヨハネの思いが現れています。「2 このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証しして、あなたがたに伝えます。」ヨハネが伝えなかったのは、このキリストにいのちがあることでした。ヨハネにとって、この方が現れたことは、いのちが現れたことに等しいことでした。「私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見た」。どういう経験をすれば、こんな言葉が出てくるのでしょうか。これはそう易々(やすやす)と言える言葉ではありません。この言葉が、どれほど深い確信に裏付けられた言葉なのかと思わされます。

ヨハネは、イエスさまの3年間の公生涯を共にしました。イエスさまのことを、自分の目で見、ときにはじっと見つめました。そのお語りになることばを聞き、自分の手が触れるほど身近な距離で、イエスさまと過ごしてきました。ともに旅をして、人々を癒し悪霊を追い出すイエス様の働きを見ました。誰もが避けるような罪人や穢れているとされている人にもイエス様は神の愛を語り、手を伸ばして触れておられました。どんな表情で、どんな眼差しを向けておられたのか、どんな声色でイエス様が人々に声をかけたのか、ヨハネは間近で見て、それを知っていました。あるとき、ヨハネはイエス様を受け入れなかったサマリア人たちに腹を立てて、滅ぼしてしまおうかとイエスさまに提案して、たしなめられたこともありました。一緒に食卓を囲んで、きっといろいろな話をしたことでしょう。ユダヤ人の指導者たちから迫害を受けたとき、イエス様がどのように振舞われたのか、ヨハネは見っていました。最後の夜に、弟子たちの足を洗って、愛を示されたイエスさまのことと、そのときに語ってくださった言葉を、ヨハネは忘れることができませんでした。たくさんのページを割いて、ヨハネはそれを福音書の中に書き残してくれています。そして、ご自分が捕らえられたときでさえ、ペテロのことを気遣っていた主イエスをヨハネは知っていました。理不尽で不当な裁判で鞭打たれ、はずかしを受けられても罵り返さなかったイエスさまが、いよいよ十字架上で、息も絶え絶えの中、語られたイエスさまのことばの一つ一つをヨハネは聞いていました。それは、自分を十字架にかけた人々の罪を執り成す言葉でした。ヨハネは、事の成り行きをつぶさにその目で見ていたのです。そして、復活の主イエスに会い、主イエスと語り、主イエスに触れました。その十字架の傷痕を見ました。「手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい」とイエス様がトマスに語られたとき、ヨハネもトマスと同じ思いでその傷跡をじっと見たはずです。

主イエスと共に時を過ごしたヨハネは、確信をもって、「永遠のいのちを、私たちは見た」と言うことができました。それはヨハネの独りよがりな思い込みではありません。それはイエスさまの弟子たちが共通して持っていた確信でした。「私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちが見た」。この確信を、ヨハネは他の弟子たちと共有していたのです。

4. 福音

さて、3節に進みます。「3 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。」思わず挿し込んだ2節の挿入句を終えて、ヨハネは仕切り直して語り始めました。ヨハネが伝えるのは、新しい教えではなく、自分たちが見、そして聞いたこと、イエス・キリストの真実についてです。真新しい教えや秘密ではありません。ヨハネが警戒していたグノーシス主義は、穢れた肉体から救われて魂が解放されるには、特別な知識を知る必要があると言って、聖書の教えを曲げていました。グノーシスというギリシャ語は、「知識」という意味です。彼らの言う「特別な知識」は、いろいろあって、つかみどころがなく、一貫していないのですが、イエス様が神であることを否定したり、逆に真の人になられたことを否定したりするものです。ヨハネは第一の手紙の中で、「イエスがキリストであることを否定する者」(2:22)とも言っています。そして、「初めから聞いていることにとどま」るように(2:24)とアドバイスしています。

福音が伝える神さまの愛を理解するのに、特別な知識はいりません。福音は、子どもでもわかる簡単な言葉で語られます。むしろ、十字架のことばはこの世の知恵にとっては愚かに聞こえるほどに、単純です。神はあなたを愛している。それ故に、あなたの身代わりとしてイエス・キリストを遣わした。キリストの十字架の死は、あなたのためのものであり、そこに神の、あなたへの愛があふれている。あなたは、イエス・キリストこそ、神様が与えてくださった救い主であると信じますか。あなたは、イエス・キリストを通して神があなたへの愛を現しておられることを信じますか。神様は真実なお方です。神を無視し、神様の思いを踏みにじってきた、不真実な私たちに対しても、神様は真実であり続け、愛を示し続けておられます。神様の愛は、真実です。私たちを見捨てることをせずに、救い主としてイエス・キリストを遣わしていただき、永遠のいのちへの道を用意してくださいました。その神さまの招きに、あなたはどうかたえますか。あなたが信じて受け取るなら、神様は罪の赦しと、永遠のいのちを与えてくださる。これが福音です。

神様は、御子イエス・キリストのいのちを掛けて示したくださった、その愛を決して出し惜しみはなさいません。救いを受けるのに、グノーシス主義が言うような特別な知識は必要ないのです。

5. 御子イエス・キリストとの交わり

3節の後半を見ます。そこでヨハネは、なぜ見たこと、聞いたことを伝えるのか、その理由を語っていきます。「あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」

ヨハネは、「あなたがたと交わりを持つようになるため」だと、その理由を語ります。この手紙を読む人が、ヨハネ達と、すなわちキリストの弟子たちと交わりを持つようになるためです。それは、キリストをよく知らない人々が、キリストをよく知っている人たちとの交わりに招かれるということです。現代であれば、クリスチャンの交わりに新しい人を招く、あるいは、キリストのからだである教会の交わりに人々を招くということです。

ヨハネは、その交わりは単なる交わりではなく、キリストとの交わりに等しいと言います。「私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」とヨハネは語っています。しかし、かつてその目でキリストを見、その身体に触れたヨハネとの交わりが、どうして御父また御子イエス・キリストとの交わりになるのでしょうか。残念ながら今の私たちは、かつてのヨハネと同じようにイエス様を見ることはできません。でもだからと言って落胆することはありません。イエス様は天に帰られたあと、私たちに助け主を送ってくださると約束していました。その助け主である聖霊が、今、イエス・キリストを信じる私たちには与えられています。私たちは御霊によって、霊の目が開かれ、心にキリストの平和が与えられます。何とも言えない神様の深い愛に満たされることができるとのことです。そして、そのとき私たちは

キリストのいのちに与っているのです。ヨハネが証しし、伝えてくれた永遠のいのちを、この世にあって既にいただき、神の前に死んでいた者から、神とともに生きる者へとされるのです。

それに、ヨハネがイエスさまと直接会い触れることができたのは、イエス様が天に挙げられたその時まででした。その後、つまり福音書やこの手紙を書いているときのヨハネは、私たちと同じように、御霊によって主イエスとの交わりのうちにいるのです。

結論：いのちは、キリストとの交わりのうちに

ところで、ヨハネは、キリストのどこに永遠のいのちを見出だしたのでしょうか。イエス様が示された数々の癒しや奇跡、死から復活されたというあり得ない出来事に、神の力を見たからでしょうか。それも大きなことだったと思いますが、イエスさまとの愛の交わりのうちにいのちを見出したのだと思います。ヨハネが、生きる力を得、心に喜びを得たのは、イエスさまから掛けられたみことばに励まされたから、イエスさまとともに過ごした時間に癒されたから、そしてイエスさまから受けた愛のゆえでした。ヨハネがイエス・キリストについて見たまま、聞いたままを伝えるのは、「あなたがたと交わりを持つようになるため」だと、その理由を語っていました。キリストのうちに「永遠のいのちを見た」と主張するヨハネが、キリストを宣べ伝える理由を「交わりを持つようになるため」というのは、この交わりのうちにこそ、いのちがあるからです。

手紙を読み進めて行くと、ヨハネが招いているこの交わりは、互いに愛し合うという愛の関係に支えられた交わりであるということが分かってきます。ヨハネは、互いに愛し合うべきであるということを繰り返し、繰り返しこの手紙の中で宣べています。

最初に、神を愛する人とは、①神を信じる人である ②神に愛されていることを覚える人である ③神に心から従う人のことである ということを確認しましたが、ヨハネもこの手紙の後半でそのことを語っています。

5：1－3をお読みします。「1 イエスがキリストであると信じる者はみな、神から生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はみな、その方から生まれた者も愛します。2 このことから分かるように、神を愛し、その命令を守るときはいつでも、私たちは神の子どもたちを愛するのです。3 神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません。」

ヨハネは、互いに愛し合うことこそが神の命令であり、この神の命令を守ることが神を愛することなのだ、このあと手紙の中で教えていきます。もし私たちが、神様から受けたように、イエスさまから受けたように、兄弟姉妹を愛していくのなら、その交わりの中に神様がいてくださり、私たちの交わりもまた、御父、御子イエス・キリストとの交わりとなっていきます。イエス・キリストこそが、私たちを活かすいのちです。